

## 動いている世界とともにどのように研究するか —ドゥルーズの生成変化の哲学をもとに—

企 画： 楠見友輔（信州大学教育学部）  
司 会： 楠見友輔（信州大学教育学部）  
話題提供： 楠見友輔（信州大学教育学部）  
話題提供： 辰己一輝（大阪大学人間科学研究科）  
話題提供： 得能想平（奈良先端科学技術大学院大学デジタルグリーンイノベーションセンター）  
指定討論： 石黒広昭（立教大学文学部）

### 企画趣旨

多くの質的研究では、データのコーディングやカテゴリー化を通して、概念や理論を生成するという方法が用いられてきた。このような方法の背景には、人間が表象によって世界を写し取ることができるという信念がある。（ポスト）実証主義であれば、表象は構造や法則のある世界をより良く説明する前提となっている。社会構成主義であれば、表象は世界を解釈する人間の認識を図やストーリーとして示す際に用いられている。しかし、両パラダイムでは、研究者の主観と研究対象が区別されており、その客觀性が表象を支えている。これに対して、人新世という問題系や、科学哲学における近年の存在-認識論的転回は、客觀的な観察という科学の原理の限界を科学者に突き付けた。本シンポジウムでは、表象の限界を考慮し、世界の一部である研究者がどのようにして、対象化し得ない世界から新しい方法で知識を創造できるかについて、主にポスト構築主義の理論を参照しながら議論する。

### 話題提供 1：表象の危機からポスト質的研究へ（楠見友輔）

2010 年以降、質的研究の方法や文体をラディカルに転換する、質的研究のポストを模索する動きがみられる。この動きは、何か特定の method 論や方法を持つものではなく、質的研究を体系化しようとする動きへの抵抗である。本話題提供では、ポスト質的研究を支えるポストヒューマニズム、ニューマテリアリズム、ドゥルーズの哲学の理論をもとに、質的研究を常に差異化する運動へと変えるというポスト質的研究のアイディアを紹介する。また、1980 年代の表象の危機から現在のラディカルな転換までの、質的研究の動向を整理する。

### 話題提供 2：障害学はいかにして「方法」を練り上げてきたか（辰己一輝）

これまで障害学は、自らが採用する「方法」それ自体が、特定の身体的経験を排除するものとなっていないか、そして、そのような排除を再生産する健常者中心主義的な権力諸関係を追認するものとなっていないかに絶えず注意を払ってきた。本話題提供では、こうした「方法」をめぐる政治的要請に応える仕方で近年現れてきた、ドゥルーズ＝ガタリの哲学や「新しい唯物論」などを取り入れた障害学の新たな理

論的諸動向を紹介しつつ、それらに共通する方法上の諸特徴について解説を加える。

### **話題提供 3：社会科学で機能するドゥルーズ哲学の理論構成（得能想平）**

本話題提供では、なぜドゥルーズ哲学は表象を逃れ、動いているものの世界を明らかにできるのかという問い合わせを考える。たとえどのような枠組みを用いても、現象を言語によって記述するという点に関しては、社会科学の必然的制約である。そのため、「写し取る」とは異なる仕方で機能するドゥルーズ哲学の姿をより具体化する必要がある。本話題提供は、ドゥルーズを社会科学に応用した L.M. Olsson の Movement and Experimentation in Young Children's Learning(2009) を参照し、このことを考える。

### **指定討論：この「ポスト」理論は誰が、なぜ必要とするのか？（石黒広昭）**

社会科学研究は通常「説明」を求める。解釈学的アプローチをとることで自立的な存在になった質的研究であるが、解釈者である研究者の特権性や、その特権化された表象とそれを支える物質・言説が批判されるようになって既に久しい。表象を生み出す「位置づけ主義」に対し、ここで提起される「ポスト」理論は研究や研究者の在り方の捉え直しを必然とするパラダイム変換ではないのか。両者の関係と実践への批判性、変革力を問いたい。

## **Doing research in Motion**

From Deleuze's Philosophy of Becoming

Yusuke Kusumi (Faculty of Education, Shinshu University), Moderator

Yusuke Kusumi (Faculty of Education, Shinshu University), Presenting Author

Ikki Tatsumi (Graduate School of Human Sciences, Osaka University), Presenting Author

Sohei Tokuno (Center for Digital Green-innovation, Nara Institute of Science and Technology),

Presenting Author

Hiroaki Ishiguro (Graduate School of Arts, Rikkyo University), Discussant

Language: Japanese